

機関番号：25501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530169

研究課題名（和文）世俗化の論理・倫理とフランス経済学の形成

研究課題名（英文）The logic and the ethic of secularization and the shaping of French Economics

研究代表者

米田昇平（YONEDA SYOHEI）

下関市立大学・経済学部・教授

研究者番号：20182850

研究成果の概要（和文）：

フランス経済学の出発点を画したボワギルベールの自由主義経済学の思想的源泉を探求し、世俗化の一般的傾向のなかで育まれた17世紀後半のフランスの新思潮、とくにピエール・ニコルなどのジャンセニストの思想の影響に光をあてた。そしてイギリスのマンデヴィルもまた思想的源泉を同じくすること、この新思潮が彼らの功利主義的な経済学の共通の母胎となった事情を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

I studied the source of Boisguilbert's epoch-making liberal Economics on the history of French Economics, and threw light on the influence of the new stream of the late seventeenth century French thought, produced in the context of secularization in general, especially on the influence of Jansenists like Pierre Nicole, etc. And I made it clear that Mandeville, Englishman, also had the same source of thought as Boisguilbert, and that this new stream was the common origin of their utilitarian Economics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：経済学

科研費の分科・細目：経済学説・経済思想

キーワード：ボワギルベール、マンデヴィル、ニコル、アウグスティヌス主義、
ジャンセニスム、経済学の起源

1. 研究開始当初の背景

(1) 経済学の生成をめぐる問題は、もっぱらスミスを基準点として、イギリスの事情に即して明らかにされてきた。しかし拙著（『欲

求と秩序—18世紀フランス経済学の展開』昭和堂、2005年）で明らかにしたように、フランスにも経済学の多元的な成立・形成の一翼を担いうる独自の流れが存在する。フランス経済学はボワギルベールに始まるから、彼の

思想的源泉を明らかにして、このフランスに独自の経済学の生成の有り様を明らかにすることが求められた。

(2) フランス経済学の特徴の一つは、その功利主義的な傾向であり、(消費)欲求や効用の観点から近代の経済社会の本質に迫っている点であるが、このような功利主義的な経済学の源泉を辿り、その後の展開を跡づけることで、経済学の起源に関して新たな知見を得ることが期待された。

(3) この場合に、論点は 17 世紀後半のフランスの新思潮およびこの新思潮を育んだ世俗化の一般的傾向と経済学の生成との関連であるから、他方では、世俗的倫理とその普及を後押しした世俗化の論理の解明が求められた。とくに奢侈論争との関連性の解明が期待された。

2. 研究の目的

以上の研究開始当初の状況を踏まえ、

(1) 世俗的倫理の普及こそは富裕の科学としての経済学の生成を促した条件であったと考えられるが、これを押し進めた世俗化の論理を明らかにする。

(2) 世俗化の論理・倫理との関連において、モラリストのラ・ロシュフコー、リベルタンのピエール・ベール、ジャンセニストのピエール・ニコルなどによって生まれた 17 世紀後半のフランスの新思潮の特徴を明らかにし、これがどのようにしてフランス経済学の思想的源泉となりえたかを解明する。

(3) このため、とりわけピエール・ニコルの道徳論考の検討によって、ニコルからボワギルベールへの継承関係を明らかにし、このことによってボワギルベールの経済学の成り立ちを明らかにする。

(3) 同じくフランスの新思潮をその思想的源泉とするイギリスのマンデヴィルに焦点を合わせ、ボワギルベールを論じるのと同じ地平上において、マンデヴィルのよく知られた逆説(「私悪は公益」)の歴史的意義を解明する。

(4) マンデヴィルが提起した奢侈論争の英仏における展開を以上の視点から総括し、この論点を含めて、経済学の起源と展開に関する新たな知見を得る。

3. 研究の方法

以上の研究は、とくにわが国ではまったく未開拓の領域に分け入るものであり、しかも研究対象は、宗教思想、文学、哲学などにも及ぶ。このため、ゴールドスミス・レスライブラリーを含めて、幅広く、関連文献を収集し、必要な文献を読み込んだ。

4. 研究成果

(1) 主な成果

① 17 世紀の世俗化の傾向(世俗的倫理の普及)は、人間を、本来的に快樂を求める欲求の主体と捉えて、私欲に従うことを人間の普遍的本性とみなす世俗化の論理によって支えられており、この論理は 17 世紀に蘇ったエピクロス(エピクロス主義)と関連づけて理解することができる。他方では、17 世紀フランスにおいて、アダムの墮罪によって原罪を背負うことになった人間を徹底的に墮落した存在とみなすアウグスティヌス主義のペシミスティックな人間理解が多大な影響を印すが、この両者の邂逅によって紡ぎだされた功利的な人間像が、ボワギルベールやマンデヴィルの経済学的前提であった次第を明らかにした。

② 対極に位置するようにみえるエピクロス主義とアウグスティヌス主義は、もっぱら利己心・自己愛に導かれる世俗の人間と社会のあり方を快樂主義・利己主義とみる捉え方において違いはない(違いは、アウグスティヌス主義はその現実を腐敗・墮落しているとみるのに対して、エピクロス主義はそうはみない点である)。17 世紀フランスの新思潮を担った文人や神学者などにみられるのも同じ人間理解であり、この点で、とりわけアウグスティヌス主義の影響を顕著に窺うことができる。彼らは利己心・自己愛に駆り立てられ、ひたすら「利益」を求める人間の功利的情念をクローズアップしたが、ジャンセニストのニコルやドマはさらに進んで、自己愛に発する功利的情念はいかにして社会的効用を発揮して秩序の形成に寄与しうるか、という「情念と秩序」の関係に光を当てた。ただし、ニコルにおいて、人間の功利的行動は宗教・政治の規範によってしっかりと繋ぎとめられていた。これに対し、彼自身ジャンセニストであったとも目されるボワギルベールは、同じアウグスティヌス主義の人間理解に立脚しながら、宗教的なくびきを逃れ、飽くことなく富や「豊かさ」を求め、快樂を希求することは人間の普遍的本性であって決して罪ではないとする。その上で、彼は人間の功利的行動が織りなす自律的な経済秩序の

存在を浮き彫りにし、市場の強制力という自己愛の対立を調整しうる安定化装置の働きによっておのずから一定の秩序が生まれるとすることで、まったく新たな地平を開いた。このようにボワギルベールはレセ・フェールの秩序原理によってニ科尔から大きな飛躍を遂げたが、そこに経済学の生成の一場面をみることができることを明らかにした。

③ 一方、ボワギルベールは消費欲求の本源性に着目し、それを社会の一構成原理とするなど、功利・効用の視点から消費主導の経済認識に至ったが、この側面は、功利主義の源流とも目されるニ科尔の延長線上に位置している。そしてこの点では、フランスの新思潮を同じく思想的源泉とし、ニ科尔やベールの影響が顕著なマンデヴィルの経済思想も同じである。このことに着目して、アウグスティヌス主義とエピクロス主義のコンテキストにおいて、マンデヴィルの「私悪は公益」という有名な逆説の歴史的意義を、英仏の思想的展開とも関連させながら明らかにした。そして、「私悪」(マンデヴィル)によるのであれ「魂の墮落」(ボワギルベール)によるのであれ、人々の諸欲求が経済社会のダイナミズムを導く原動力であるとして、消費・消費欲求主導の経済ビジョンを描いたボワギルベールとマンデヴィルを同じ地平上に置くことにより、経済学の起源にかかわる新たな問題領域が開けることを明らかにした。

④ 消費・消費欲求が生産を規定し、さらにそのことを通じて社会の構成そのものを規定するというこのような消費主導論は、やがて、生産の内在的条件への着目と、その条件への認識の深まり(資本蓄積論)によって相対化されていくが、しかしマンデヴィルがその逆説によって鮮烈にクローズアップしてみせたような、功利的人間の織りなす「欲求の社会」としての社会の有り様が変わりがないかぎり、消費・消費欲求は生産の外部的条件として、あるいはこの社会を規定するより本質的条件として、他の経済諸要因に対する一定の主導性ないし規定性を失うことない。この意味で、今回の研究により、経済学の生成問題に関して、スミスを基準点とする従来の見方を相対化し、新たに、経済学のフランス的起源を論じうる可能性を切り開くことができた。

(2) 得られた成果の位置づけ

17世紀後半のフランスの新思潮の研究はこれまでおもに宗教思想史や文学史や哲学史の領域で行われてきたこともあって、功利主義の源流として注目されることはあっても、それを経済学の生成と関連づける研究はこれまであまり行われてこなかった。とく

にわが国では皆無であった。欧米の例外的な一部の研究もいまだ期待されるべき成果を生み出していない。思想的源泉を同じくするボワギルベールとマンデヴィルを同じ地平に置いて彼らの達成の特質を論じる視点が重要であり、この点で、本研究は経済学誕生の事情に迫る新たな領域を切り開いたと言える。

(3) 今後の展望

とはいえ、いくつかの課題が残された。

① フランスの新思潮を起源とする経済学の展開を捉える上で、マンデヴィルの奢侈容認論を基準に英仏の経済思想の展開を捉え直すことが有効であるが、奢侈論争の英仏における展開との関連で、このことを論じるまでには至らなかった。これによって英仏の違いを鮮明に浮き彫りにすることもできるはずであり、今後の重要な課題として残された。

② 17世紀後半のフランスの新思潮について、取り上げることでできた人物や文献は限られており、エピクロス主義との関係についても必ずしも十分に論及できなかった。さらに掘り下げることが必要であり、近代エピクロス主義を代表するガッサンディなどを含めて今後、読み広げていく。

③ イギリスに関してはマンデヴィルの受容ないし拒絶のあり方をさらに考究する必要があるし、またフランスに関しても、ボワギルベール以後の展開、とくにニ科尔の影響が顕著なアベ・ド・サン＝ピエールや、サン＝ピエールの影響を受けたムロン、さらにムロンの影響を受けたモンテスキューなどを俎上にあげて、フランス起源の功利主義的な経済思想がどのような展開をたどるか、という重要な問題が残されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 米田昇平、マンデヴィルの逆説、その歴史的意義—英仏の思想的展開との関連で—(上)、下関市立大学論集、査読無、54(3) 2011、61-76 ページ。

② 米田昇平、経済学の起源とアウグスティヌス主義—ニ科尔からボワギルベールへ—(下)、下関市立大学論集、査読無、54(2) 2010、37-48 ページ。

③ 米田昇平、経済学の起源とアウグスティ

ヌス主義—ニコルからボワギルベールへ—
(上)、下関市立大学論集、査読無、54(1)
2010、49-62 ページ。

④ 米田昇平、経済学の起源とアウグスティ
ヌス主義—17 世紀後半のフランス思想を中
心に、経済学史研究、査読有、51(2)、2010、
68-82 ページ。

〔学会発表〕(計 1 件)

① 米田昇平、ボワギルベールの自由主義経
済学とその思想的源泉—ジャンセニスムと
の関連をめぐって—、経済学史学会第 73 回
全国大会、2009. 5. 31、慶應義塾大学。

〔図書〕(計 1 件)

① 米田昇平、他、京都大学学術出版会、啓
蒙と社会—文明観の変容、2011、103-131 ペ
ージ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

米田昇平 (YONEDA SYOHEI)
下関市立大学・経済学部・教授
研究者番号：20182850

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし